

近代日本における診療録の歴史

長門 谷 洋 治

カルテ（診療録）は個人の病気の記録であるが、受診当時の医学・医療の水準を知ることができる一級史料でもある。明治時代と現代とを比較してみるとつぎのような変化がある。

毛筆書き → ペン書き
縦書き → 横書き
ドイツ語 → 英語・日本語
自費 → 保険

熱型表は体温を赤線で、脈搏を青線で記す場合とその逆に体温を青線で、脈搏を赤線で示す場合がある。寺畑喜朔氏は第八一回本総会で「金沢における明治初期の体温表」として、明治九年ホルトルマン指導のものと体温表を示されているが、現在のものと大差なく、オランダはじめ西欧のそれがわが国に紹介されて定着したとみることができよ

う。

旧医師法では診療録の保管期限を十年間としていたが、昭和八年より五年間に改正されて今日に至っている。付言すれば診療報酬明細書（レセプト）の保管期限も五年間である。カルテは作成後、時日の経過とともにその利用率が落ちてくることのほかに、なによりも保管・管理の問題から、古いカルテは一定期間後廃棄することが多い。ただし一部の病院では近時病歴管理がその専門家によって行われるようになり、退院カルテは永久保存ないしマイクロ化される傾向にある。個人の検査データをコンピュータにインプットしておくことなども、老人保健法の施行（昭・五八）後とくに活発になってきた。他方カルテは統計的な処理を行ったのちは法定期限後、廃棄処分するのやむをえないとの意見があり、また各個人に返却するのがよいとする論者もあるが、これは実際には不可能なことであろう。廃棄に踏みきれずに過ごしているうちに移転とか、改築、あるいは担当者の異動などを機に一挙に廃棄されることも多い。廃棄のさいには医学的に重要であったケースのカルテの他に、いわゆる有名人のカルテもピックアップして保存さ

れることが望ましい。有名人は後世、病跡学の対象となる
ことがあり、そのさいカルテは有力な情報源である。元
来、カルテ内容は一般に公開されないのが通常だが、一案
として法定保存期限後五十年経てば、ある程度オープンに
してもよいのでないか。とくに上述の有名人の場合は公開
が望まれる（たとえば新聞にその死亡が報じられるような人
に）。

私は昭和五十八年十月、第七回日本診療録管理学会（大阪
市）において『診療録にみる先人の足跡』なる講演をする
機会を得たが、そのさい各方面のご協力で戦前を中心とし
たいいくつかのカルテを拝見する機会に恵まれた。そのうち
の代表的なもの二、三を簡単に紹介する（いずれもコピー）。

① 大阪市立桃山病院 明治二十年創始の大阪市の伝染病
院。明治二十八年ころより戦後初期に至る間の約二十八万
件のカルテが病名別・年別に保管されており、わが国伝染
病学史の宝庫である（橋本博氏の好意による）。

② 京都市で耳鼻咽喉科医であった戸田徐作氏が 大正八
年、開業した当初のカルテ数十枚。患者中に花柳章太郎氏

の名もある（横村庄三郎氏らの好意による）

③ 日赤中央産院（東京都） 大正十一年開院第一号分娩者
のカルテ（同院ではのちに久慈直太郎氏が昭和三十六年までの三
十九年間の全入院例の統計・解析を行い『近代産科学の変遷』と
して出版した）（日赤医療センターの提供）。

④ 聖バルナバ病院（大阪市） 昭和三年（同院が西区から現
在地の天王寺区へ移った年）の分娩記録簿、外人の医師・看
護婦・患者名がある。

昭和五十八年の同記録も提供され上述のものと対比でき
た（山村博三氏の好意による）。

⑤ 金沢陸軍病院 昭和十九年の入院患者カルテ。日本語
縦書き、模範的ともいえる記述。病名分類番号、在院日数
などが記載され、病院長の査閲すみ印もあり、現在の病歴
管理の水準に比肩し得る。臨床検査の面でも当時の軍隊が
先駆的な役割を果たしていたことが同カルテよりも判る。な
お同病院の後身、国立金沢病院初期のカルテ、および戦前
の金沢医大入院患者カルテも提供を受く（寺畑喜朔氏の好意
による）。

⑥ 明治二十二年、和歌山県大島沖で遭難したトルコ軍艦

の乗組員負傷者の診断書。病状・処置・予後などについて記してある。三十三通（梅溪昇氏の好意による）。

⑦明治二十二年 日本生命創業初期の健康診査に関する書類。当時同生命の診査医で、その後第一生命を創始した矢野恒太署名入りの書類もある（日本生命医務部提供）。

その他容體書（診断書）、死亡診断書、手術記録、手術承諾書、処方箋などが参考となる。

最後に日々どこかで廃棄されつつある、人類の病氣との闘いの記録である、この世に唯一無二のカルテが、たとえ一部分でも保管される『診療録資料館』のごときものが創始され、貴重な遺産が研究者の便に供されることを望みたい。

（大阪府豊中市 皮膚科開業）

江戸医学館の考試弁書

『癲癇狂奔』について

——当時の精神病学説をみる——

岡田靖雄

わたしたちの精神科医療史研究会所蔵資料に『癲癇狂奔』一冊がある。これは「医学館」とすりこまれた野紙にかかれた癲癇狂に関する小論二篇をとじたもので、表紙に「癲癇狂奔」とある。それぞれの筆者の名は、あとから同一人の筆で書きいれられている。順にあげると、塩田孝昭〔？〕、吉田松庵、田村長□（虫食い）、小森西清、古田休菴、坂本養禎、桂川甫悦、岡田昌春、藤本立〔？〕運、井上齡菴、赤松久安、谷邊玄殊〔？〕、吉田周禎、多紀安琢で、残りの篇には名がはいっていない。

このうち桂川甫悦は、桂川家六代甫賢國寧の三男として一八三五年（天保六年）に生まれた。本名は國謙、のち次謙。講武所にはいり、藤澤家をつぎ、維新のころには陸軍